

小児看護業務の日常に 検査を取り込みましょう

日本中どここの病院、クリニックにかかっても、高い医療レベルの診療が受けられるよう、医療の均てん化を目指してさまざまなガイドラインが整備されています。一人の子どもを診ていくうえで、医師だけがガイドラインを振りかざすのではなく、看護師、メディカルスタッフが協働で診療を行う時代になっています。このため医療に携わるすべての職種の人たちが、どのような検査結果で診断がついたのか、どのような検査で経過をみているのか、正しい検査値の読み方が必要となります。

日々医療は進歩し、新しい検査方法、検査機器も普及してきました。これら多くなった検査評価について、医師向けの医学書は多くありますが、どのように看護に活かすか、検査値から疾患をどう考えるかという視点で書かれた書籍はあまり多くありません。看護師も検査を読む必要はありますし、看護に活かす責務もあります。

どのような検査がなされ、出てきた検査値が何を意味するか、医師はどのように評価しているのか。子どもを看護する看護師は、小児看護という専門的な立場からディスカッションできるよう期待されています。第一線で活躍されている医師を中心に、検査の値のとりえ方について臨床に沿う形で執筆いただきました。忙しい臨床のなか、ご

協力いただいた執筆者の方々に厚く御礼申し上げます。

今まで科学技術は日々進歩し、医療技術も新しい機器が開発され、不安が少ない輝かしい新しい時代を生きているように感じていました。2019年12月 COVID-19が流行し、あっという間にパンデミックとなり、2021年を迎えています。ペストやスペイン風邪のような感染症は過去の疾患とみていた人類の思い上がりに、大きなしっぺ返しをなされている感があります。ウイルスにとってヒトは単に宿主でしかなく、自らの増殖、繁殖に必要なだけの存在です。どのようにこのやっかいな新型ウイルスと付き合っていけばよいのか、PCR 検査と COVID-19について巻頭のカラーグラフで、新潟大学小児科学講座の幾瀬先生と齋藤先生に解説いただきました。

生物であれば必ず疾病はあり、死があります。そのなかでどれだけ有意義な生を実感できるかが問われている時代だと感じます。本特集が皆様の日常業務に、そして子どもたちのために少しでもお役に立てれば幸いです。

医療法人社団まなと会はしもと小児科院長

橋本政樹
Hashimoto Masaki